

---

# ダブルデート

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダブルデート

### 【Nコード】

N3209R

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

同じ日に同じ場所でデートをすることになった双子。果たしてそのデートはどうなるか。主人公達の名前は某双子のユニットからです。

## 第一章

### ダブルデート

二人はだ。今話をしていた。

見ればどちらも全く同じ姿形である。一直線の眉に強い光を放つ黒い目、引き締まった唇、整った鼻、細長めの顔に黒く耳を隠した髪。背もどちらも中背で痩せた身体をしている。

その二人がだ。今家のリビングと思われる場所でゲームをしながらか話していた。

一方は赤い服に黒いズボン、もう一方は青い服に白いズボンだ。まず赤い方が言う。見れば右手にコーラの缶を持って飲みながらゲームをしている。

「それでな、直弥」

「ああ、和弥兄貴」

青い方も応える。見れば彼もコーラを飲んでいるが左手に持っている。

「デートのことだよな」

「参ったよな」

和弥が困った顔で溜息をついた。

「本当にな」

「そうだな」

直弥も兄の言葉に頷く。

「本当にな」

「向こうも知ってるよな」

「ああ、知ってるよ」

和弥は右手でゲームをしながら述べた。

「それはな」

「それでな」

「ああ、それで？」

「時間も場所も一緒だよな」

直弥はこう兄に尋ねる。やはりゲームをしながらである。

「デートは」

「そうだな。一緒だな」

「じゃあ向こう俺達のことわかるのか？」

「難しいだろ」

「やっぱりそうか」

直弥は兄の和弥の言葉に渋々ながら納得した顔になった。

「難しいか」

「っていうかわからないと思ってもいいだろ」

「しかしな」

「しかし？」

「どやるしかないだろ」

直弥はその渋々といった顔で言った。

「やっぱりな」

「それしかないよな」

和弥も言った。

「行くしかな」

「じゃあ兄貴」

「ああ」

「今度の日曜な」

「わかった」

和弥は弟のその言葉に頷いた。そしてだった。

彼等はそのままゲームを続ける。それぞれの手でだ。

そこに後ろからだ。中年、いや初老の母の声がしてきた。

「和弥、直弥」

「ああ、母ちゃん」

「飯？」

「そうだよ」

二人が振り返って見れば二人にそっくりの顔の母親がいた。

「早く来な。父ちゃんも戻って来るよ」

「ああ、わかったよ」

「それじゃあね」

「しかしあんた達ってね」

母は息子達のその顔を見ながら述べるのだった。

「どんどん似てくるねえ」

「仕方ないだろ、双子なんだからさ」

「母ちゃんが産んだんだろ」

「産んでもあれだよ」

母はたまりかねた顔で二人に話す。

「そこまでそっくりになっってくるなんてね」

「見分けつくよな」

「ちゃんと」

「安心しな。つくよ」

このことはしっかりと言う母だった。

「ちゃんとね。わかるよ」

「あと父ちゃんもな」

「わかってくれてるしな」

「当たり前だろ。父ちゃんはシェフだよ」

だからだと言うのである。

## 第二章

「イタリア料理のね。オーナー兼シェフじゃないか」

「いや、それは関係ないだろ」

「全然な」

二人は首を傾げさせて母の今の言葉に返す。

「それと俺達の見分けがつくって」

「関係ないだろ」

「まあそうだけれどね」

母もそれは認めた。

「けれどあんた達も今の専門学校から出て」

「ああ」

「店に入るからさ」

「シェフの修行は怠るんじゃないよ」

母はこのことは強く言うのだった。

「伊達に中学、高校の頃から仕込んでるんじゃないからね」

「わかってるさ、それは」

「料理なら任せてくれよ」

これは強く言う二人だった。

「それはさ」

「ちゃんとさ」

「基本はパスタだよ」

これだというのだった。

「パスタができないと何もできないからね」

「イタリア料理の基本だしな」

「やっぱりな」

「そういうことだよ。しっかりと勉強するんだよ」

「わかってるって」

「ちゃんとしてるからさ」

「じゃあ食べな」

母はあらためて二人に話した。

「刺身だよ、今日は」

「ああ、それじゃあな」

「食べるか」

こんな話をしてから夕食を食べる二人であった。そうしてだった。

その日曜だ。二人は連れ立って駅前のコーヒーショップにいた。

そこで二人向かい合わせで席に座りコーヒーを飲んでいた。

そこを待ち合わせの場所にしていたのだ。まず和弥が言う。

「なあ」

「何だよ」

「まさかな」

「ああ、そうだな」

直弥も兄に言葉を返す。

「同じ服持ってたなんてな」

「デザインだけじゃなくて色もな」

「全部同じだったなんてな」

「何だよ、これ」

和弥はうんざりとした顔で述べた。

「本当に俺達これじゃあ見分けつかないぞ」

「つくのは父ちゃんと母ちゃんだけだな」

「親だから見分けはつくだろ」

それはだというのだ。

「幾ら何でもな」

「けれど相手はな」

「ああ、そうだな」

「つかないとな」

「絶対にな」

こう話す二人だった。見ればどちらも白いコートにセーター、それに下も白いズボンである。靴だけが黒くそれがやけに目立つ。

だがその白尽くめのデザインまでそのまま同じの服の二人はだ。  
困った顔で言うのだった。

「なあ、せめてな」

「せめて？」

和弥が直弥に言ってきた。声まで全く同じだ。

「アクセサリーで区別がつけばな」

「アクセサリーか」

「マフラーでもあればな」

こう言う和弥だった。

「赤と青とか。そういう色でな」

「ああ、そうしたらよかったな」

直弥も兄の言葉に頷いた。

### 第三章

「せめてな」

「全くだよ。それでな」

「ああ、それで？」

「兄貴の相手誰なんだよ」

このことをだ。兄に問うのだった。

「一体どんな人なんだ？」

「綺麗な娘だぜ」

和弥は楽しげに笑ってその問いに答えた。

「本当にな」

「それでわかると思うか？」

「わかってくれ」

「いや、それは無理だろ」

すぐにこう返す直弥だった。

「その答えじゃな」

「じゃあ具体的に言うな」

「ああ」

「髪が赤くて長いのを左右でリングにしているな」

まずはここからだった。

「それではつきりとした目で」

「目は大きいんだな」

「ああ、大きい」

こう話す和弥だった。

「きらきらとした目でな。それでだ」

「ああ、それで」

「鼻はあまり高くないな」

それはだというのだ。

「それで口は小さい。けれどピンク色でいいぜ」

「そうか、わかった」

直弥は確かめる顔で聞いていた。そうして兄に問うた。

「次にはどんな感じなんだ？」

「胸は小さいな。小柄だな」

「胸は小さいんだな」

「ここだ。直弥の顔が曇ってきた。」

「そうなんだな」

「ああ。服はいつもロングスカートでひらひらとした服なんだよ」

「あの娘だな」

直弥は不意に窓の外を指差した。そこにはだ。

和弥が言ったままの女の子がいた。赤とピンクのふわふわとしたワンピースのロングスカートを着てだ。そうしてそのうえで上に白いカーディガンを羽織っている。

しかし問題はそれが一人ではなかった。二人いるのだった。

左右並んで店の中に入ろうとする。直弥はその二人を見て和弥に話す。

「あれだよな」

「ああ、そうだって言いたいかな」

「何で二人なんだ？」

直弥が言った。

「二人もいるんだ、一体」

「俺が聞きたいんだがな」

「しかもそっくりそのままだな」

「どうということなんだ」

和弥は真剣に考える顔になっていた。

「これってな」

「わからないな。何なんだ」

二人が首を傾げさせているとだった。

その二人が彼等のところに来てだ。彼女達も驚いた顔で言うのだった。

「和弥君が二人なんて」

「どっちが直弥君なの!？」

「こう言うのである。」

「一体どちらが」

「誰なのかしら」

「いや、俺もそれ言いたいけれどな」

「どっちなんだ!？」

二人も目を丸くさせて言う。自分達の横に立つ二人の少女を見ながら。

「どっちが平野美恵なんだ」

「平野美喜はどちらだ」

「私が美恵よ」

まずは右側の娘が言ってきた。

「そして私が美喜よ」

「どっちがどっちなんだ」

「さっぱりわからないんだが」

「いえ、それはこっちも」

「どっちがどっちだか」

美恵と美喜もこう返すのだった。戸惑った顔でだ。

「どっちが和弥君なの!？」

「直弥君はどちらなの?」

「俺が和弥だけだ」

「俺が直弥だけだ」

二人はそれぞれ言った。

## 第四章

「けれどそれでも」

「わかるかな」

「全然」

「誰が誰だか」

二人はこう返すのだった。

「一体全体」

「どうやって見分けるんだか」

「そうよね。お互い誰が誰かわからないから」

「そうすればいいのか」

「どっちとデートすればいいんだ」

しかしだった。ここで和弥が呼んだ。

「美恵ちゃん」

「ええ」

右側の娘が手をあげてきた。

「私が美恵よ」

「デートしようか」

「ええ、それじゃあ」

その言葉に頷く美恵だった。そしてだ。

直弥もだった。美喜を呼んだ。

「美喜ちゃん」

「はい」

左側の娘が応えたのだった。

「行くのね」

「そうね。それじゃあね」

「デートしようか」

「ええ、今からね」

こう話してだった。二組になった。こうして何はともあれデート

をはじめめるのだった。

しかしだった。どちらもどちらもだ。全くわからないままだった。ふと手を離せばだ。お互いがわからなくなる。アクセサリーシヨップの中で買い物をした時だ。これは美恵と美喜の提案によるものだ。二人の趣味だ。

和弥をだ。美喜が後ろから呼んできたのだ。

「ねえ、直弥君」

「えっ？」

和弥がこう言って振り向いた時にだ。気付いたのだった。

「あれっ、違う」

「御免、間違えたわ」

美喜は困った顔で和弥に謝った。

「直弥君と」

「そうよな。これは」

お互いに言い合うのだった。

「どっちがどっちだか」

「わからないわよね」

「本当に」

こう話してだった。まずは二人が間違えた。

そしてである。今度はハンバーガーシヨップに入った。そこでだった。

直弥がだ。注文していたハンバーガーとコーラを持って来て席に待っている美恵に言ってしまった。二組のカップルはそれぞれの席に二人ずつ座っている。そこでだった。

「美喜ちゃん、お待たせ」

「私美恵だから」

こう返す美恵だった。見れば和弥が席にいない彼女一人だ。美喜は隣のテーブルだった。

「間違えたのね」

「御免、間違えた」

「美喜はそつちよ」

こう言うのだ。美恵の横で美喜が困った笑顔を見せていた。その笑顔でこう言うのだった。

「今度は私達ね」

「そうだな。わからないな」

直弥はほとんど困り果てた顔になっていた。

「これじゃあどっちがどっちなんだか」

「本当にね」

こんなデートだった。お互いにどちらがどちらかわからない。しかも一緒にデートをしているから尚更だ。その彼等を見る街の人達も言う。

「あれっ、あのカップル」

「そうよね。四人共ね」

「同じ顔が二組ずつって」

「鏡か!？」

「ドッペルゲンガー!？」

こんな言葉まで出た。

## 第五章

「まさかな」

「いや、男も女もだしな」

「服も同じだしな」

「狙ってやってるのか？」

「そうも思えるよな」

こっぴどいられるのだった。四人もそれを聞く。

それでだ。和弥がまた言った。

「なあ」

「ああ、聞こえてるさ」

「どうする？」

直弥に対して言うのだった。

「いい加減どつちかわからないしな」

「それに周りからも言われるしな」

「あれだよ。仮面ライダーとショッカーライダーより見分けがつき

にくいぞ」

「俺もそう思う」

兄にこっぴどく返す直弥だった。

「これはな」

「どうする？本当にな」

「そうだな。ここはな」

「ああ、マフラーか」

「それ買おうぜ」

具体的な言葉だった。

「マフラーの色を変えたらそれでわかるからな」

「そうだな。なあ」

直弥は美恵に声をかけた。

「美喜ちゃんもそれでいいかな」

「私美恵だから」

「こうなるからな。とりあえずそれでいいかな」

「ええ、いいわ」

「私も」

美恵だけでなく美喜も言ってきた。

「本当にどっちがどっちかわからないから」

「是非ね」

「よし、決まりだな」

「そうだな」

直弥と和弥も顔を見合わせて頷き合った。そうしてだ。

二人は店に入りマフラーを買った。その色は。

和哉が赤、直弥が青だ。そしてだ。

美恵も赤、美喜もまた青だった。お互いの色は合わせたのだ。

そしてそのうえでだ。四人で店の外で話すのだった。

「これでな」

「そうだよな」

まずは和弥と直弥が話をする。

「どっちがどっちかな」

「見分けがつくよな」

「そうね、本当にね」

「わかるわ」

美恵と美喜も言った。

「本当にどっちがどっちかわからないから」

「困ってたし」

「よし、じゃあこれでいいな」

「デート再開だな」

こうしてだった。二組のカップルはデートを再開した。相変わらず

周囲の声は口さがない。しかしであった。

四人はもうそれは意識しなかった。何故ならだ。

「いや、マフラーの色だけでな」

「わかるな」

「そうよね。だからね」

「もうこれでいいわ」

お互いがわかることにだ。彼等はほっとしていた。それでなのだ。周囲の声はもう気にならなかつた。そしてだつた。

「なあ、それでな」

「これからだよな」

「どうする？これから」

「何処に行こうか」

男二人がこれからどうしようかと考えているとだ。ここであつた。まず美恵が言つた。

「映画館に行こう。今面白い恋愛の映画やってるのよ」

「そうね。ここは居酒屋ね」

美恵も言つてきた。

「この近くに安くて美味しいお店があるのよ」

「んっ？」

「場所が全然違うな」

和弥と直弥は二人の言葉を聞いてふと気付いた。

「行きたい場所は違うのか」

「そうなんだな」

「それでどっち行くの？」

「これから」

「ええと、俺は」

和弥は美恵の顔を見て言つた。

## 第六章

「映画館にするよ」

「そう。それじゃあ一緒にね」

「それじゃあ俺は」

次は直弥だった。彼は美喜の顔を見ている。

「居酒屋にな」

「行くのね」

こうしてだった。それぞれの行く先が決まった。そうしてだった。

ここでお互いに別れてだ。言い合っただった。

「じゃあこれでな」

「またな」

「デートの感想聞かせてね」

「それじゃあね」

別れの挨拶の後でそれぞれのデートに入る。彼等はそれから楽しんでんだ。

そしてだった。お互いにそうしたデートを続けるうちになった。

お互いに全く同じ服を着ていてもだ。相手がわかるようになったのだった。

このことをだ。彼等は話した。四人揃ってだ。

和弥は美恵と並んで、直弥は美喜と並んでだ。そのうえで向かい合って話す。四人共笑顔になっている。そのうえでの言葉だった。

「いや、こうしてさ」

「そうだよな」

まずはここから話すのだった。和弥と直弥からだ。

「お互いにいてもな」

「相手が誰かわかるようになったな」

「そうだというのである。」

「美恵ちゃんと美喜ちゃんの違いがな」

「わかるようになったよな」

「私も」

「私もだから」

美恵と美喜も言うのだった。

「和弥君と直弥君の違いがね」

「わかってきたわ」

彼女達もだ。そうだというのである。

「外見は同じでもね」

「見ただけでもね」

「そうそう、それでもわかるんだよな」

「不思議とさ」

男二人も話す。

「何でだろうな、これって」

「本当に何処から何処まで同じ外見なのにさ」

男二人も女二人もそれぞれ鏡に映したかの如きである。それは変わらない。

それでもである。わかるというのであった。

「この理由は何でだろうな」

「本当にな」

「多分これって」

「そうよね」

女の子二人がにこりと笑い合ってた。そして言った。

「好きだからよね」

「それでなのね」

「好きな相手はわかる」

「相手が誰なのか」

男二人は彼女達の話聞いて述べた。

「そういうことか？」

「つまりは」

「うん、そうだと思うわ」

「だからなのよ」

女の子二人はこう彼等にも言う。

「好きな相手ってね」

「感覚で誰かわかるっていうしね」

「それでか」

「成程な」

和弥と直弥は腕を組んで考える顔になった。その表情も動くタイミングも素振りもだ。何もかもが同じだった。本当に鏡であった。しかしそれでもだった。次第にだが。

「わかるようになるんだな」

「好きならな」

「二人だつてそうでしょ？」

「私達のことは」

「ああ」

「勿論だよ」

これがその二人の返事だった。

「わかつてきたよ」

「どっちがどっちか」

「そうよね。好きならね」

「最初は無理でも」

それでもだというのであった。

「わかつてくるものよ」

「どちらが誰かね」

「外見ではわからなくても」

「その中でつてことかな」

和弥と直弥はここでこう言った。

「これはやっぱり」

「そうなるのか？」

「そう思うわ」

「外見だけじゃないからね、人間って」

美恵と美喜も話す。何はともあれ四人はそれぞれのパートナーが誰なのかわかるようになった。あそれは目に頼ってではなかったのだ。別のことだ。

ダブルデート 完

2010・10・31

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3209r/>

---

ダブルデート

2011年3月2日22時10分発行